

(参考様式6)

農山漁村振興交付金（農山漁村活性化整備対策）
事業活用活性化計画目標評価報告書

作成日：令和元年 9月24日

活性化計画名	ひたちおおみやしのうそんちくかっせいかけいかく 常陸大宮市農村地区活性化計画			
計画主体名	計画主体コード	計画番号	計画期間	実施期間
常陸大宮市	082252	1	平成26年度から 平成30年度	平成26年度から 平成27年度
活性化計画の区域				
常陸大宮市農村地区（茨城県常陸大宮市）				

1 事業活用活性化計画目標の達成状況

事業活用活性化計画目標	目標値A	実績値B	達成率（%） B/A	備考
交流人口の増加	51.8%	93.3%	180.1%	

（コメント）

国道118号沿いに「地域資源活用総合交流施設（都市農山漁村総合交流促進施設）」として「道の駅常陸大宮」を整備することにより、市内主要観光地への入込客数を平成25年度末累計（H21-25）の2,327,800人から平成30年度末累計（H26-30）で3,534,000人に増加（増加率51.8%）させることを目標として設定したのに対し、実績では4,500,350人（増加率93.3%、966,350人増）となり、目標を大きく上回る交流人口の増加を達成することができた。

なお、道の駅常陸大宮における平成28年3月25日にオープン以降の立寄人数（レジ通過による来場者数）の実績については、平成27年度（7日間のみ供用）31,014人（目標値設定なし）、平成28年度754,032人（目標値330,000人）、平成29年度608,607人（目標値360,000人）、平成30年度583,843人（目標値380,000人）、4か年計1,977,496人（目標値1,070,000人）となり、新たな交流拠点として多くの観光客等が来場している。

2 目標の達成のために実施した各事業の内容と効果

事業メニュー名	事業内容及び事業量			事業実施主体
都市農山漁村総合交流促進施設	<ul style="list-style-type: none"> ・実施設計 1 式 ・地域資源活用総合交流促進施設（農産物直売所・食材供給施設等）1 棟 1,139 m² ・体験農園（暗渠排水 1 式）L=70m ・コミュニティ広場 3,380 m² ・子ども自然体験広場 11,240 m² ・外構（駐車場等）1 式 			常陸大宮市
管理主体	事業着工年度	事業竣工年度	供用開始日	
常陸大宮市	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年 3 月 25 日	
事業の効果				
<p>「都市農山漁村総合交流促進施設（地域資源活用総合交流施設）」として「道の駅常陸大宮」を整備したことにより、多くの観光客等が立ち寄る新たな拠点となり交流人口の増加を図ることができ、本市の知名度向上や地域間交流の推進など地域活性化に繋がった。</p> <p>また、「道の駅常陸大宮」の供用開始により、施設内直売所への地域の農産物出荷による販路拡大、食材供給施設（レストラン）での手打ちの地元常陸秋そばの提供、農産物加工施設における地元農場の牛乳を使ったジェラート加工、地元産エゴマの搾油加工など地場産品を活用した商品の加工販売も開始しており、地産地商や6次産業化の推進も図られている。</p> <p>なお、「道の駅常陸大宮」の管理運営にあたっては、新たに第3セクターが設立（従業員約60名）となったことから、地域の雇用創出にも繋がっている。</p>				

3 総合評価

都市農山漁村総合交流促進施設（地域資源活用総合交流施設）として整備した「道の駅常陸大宮」については、平成 28 年 3 月 25 日の施設供用開始以降、平成 30 年度末までの約 3 年間の立寄人数（レジ通過による来場者数）の累計では、およそ 200 万人近くにまで及んでおり、年間平均では約 65 万人となっている。市内主要観光地への入込客数を平成 25 年度末累計（H21-25）と平成 30 年度末累計（H26-30）の比較した場合の増加率についても、目標増加率 51.8%に対して実績増加率 93.3%となり、目標を大きく上回り達成することができた。

「道の駅常陸大宮」が都市と農村との交流拠点としての機能を維持・強化していくために、生産者や関係機関等との連携により地元農産物等を活用した新たな加工品開発やレストラン等のフードメニュー充実などに継続的に取り組むとともに、担い手確保のための農業交流体験や久慈川沿いの立地環境を活かした体験プログラムなど新たな施策展開への発展も視野に入れながら集客強化を図っていきたい。

4 第三者の意見

茨城大学 人文社会科学部 現代社会学科 准教授 小原 規宏

久慈川沿いに立地する道の駅常陸大宮は「かわプラザ」の愛称で親しまれ、清流と四季の自然を体感できる道の駅として市外県外からも多くの観光客が訪れ、都市と農村の交流拠点としての役割は達成できているものと分析する。

農産物の販売拡大という点においても、他の直売所との差別化を図り西洋野菜を中心とした販売をコンセプトとして地域農業の生産振興を図り、道の駅周辺で生産するえごまを地元生産組合と連携して道の駅内で搾油加工し「えごま油」として商品化するなど地域農業の活性化にも寄与している。

他方、道の駅周辺エリアにおいては、道の駅を核とした活性化活動を地域住民が主体となって展開する協議会も発足し、遊休農地を活用したえごま栽培の農業体験交流プログラムや久慈川沿いに広がる荒廃竹林をタケノコ畑として再生するプロジェクトなどの動きも出てきている。このプロジェクトの一環では、茨城大学においても学生と地域とが協力して、切り出した竹を灯籠にして道の駅親水広場をライトアップする「竹あかり」イベントを開催し、地域の新たな魅力発信に挑戦している。

道の駅常陸大宮は、多くの観光客が訪れる観光拠点であるとともに、地域活動の拠点としての機能も有していると言え、今後も多くの観光客や地域住民等が立ち寄るような交流拠点として存在し続けていけることを望んでいる。そのためには、地域の歴史や伝統などを尊重しつつ、新たな資源の発掘、融合の必要性も加味しながらより一層昇華させ、常陸大宮ならではのストーリーある商品や体験の場を提供し続けていく必要があるものとする。